

中世・草戸千軒探検 ②

～つくる(鍛冶)～

草戸千軒Ⅰ展示室では、今からおよそ600年前の南北朝時代を中心とする時期の、草戸千軒の町並みを実物大で復元するとともに、実際の出土資料を生活の場面ごとに分類して展示し、人々の生活

の様子を詳しく紹介しています。

前回に続いて、「ものづくり」にかかわった職人の世界を展示資料から紹介します。今回は「作る(鍛冶)」のコーナーです。

鉄は適度な硬度をもち、さまざまな形に加工が可能な金属として中世の人々にも広く利用されていました。中世の鉄はもっぱら砂鉄を原料に生産されており、良質の砂鉄が採れる中国山地一帯は、当時の日本列島におけるもっとも重要な鉄の産地でした。

中国山地で生産された鉄素材は、河川交通などを利用して瀬戸内海沿岸部の町に運び出され、農具や刃物などに加工されていたものと考えられます。また、良質な鉄素材の一部は、沿岸部の町から海路によって遠隔地へと運ばれることもあったようです。

芦田川の河口近くに栄えた「草戸千軒」も、そうした町の一つであり、遺跡からは鉄の加工が行われていたことを示す多くの遺物が出土しています。とくに目立つのは、鉄素材を叩いて鍛えることによって製品を作る、鍛冶に関する遺物です。

鉄を鍛えるためには、鉄素材や製品を加熱する必要があります。そのための施設が「炉」で、そこには火を高温に保つために鞆による送風が行われます。送

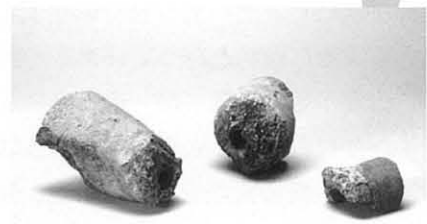
風管の先端は高温に耐えるよう粘土で作られていますが、これが「羽口」と呼ばれています。遺跡からは写真1のような羽口の断片が大量に出土しています。

また、写真2は製作途中で廃棄された鉄器の未製品で、「てこ」呼ばれる棒状の鉄の先に付けた鉄素材を折り曲げて鍛錬していたことが具体的にわかる貴重な資料です。

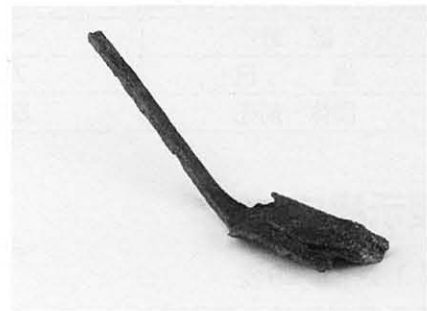
さらに、製品を刃物として仕上げるためには砥石による研磨が必要ですが、遺跡からは荒砥から仕上げまでのさまざまな砥石が出土しており、この町で刃物の製作から研磨にいたる作業が行われていたことがわかります(写真3)。

写真4は木材を削るための大工道具である手斧の刃先ですが、このほかにも多くの鉄製品が遺跡から出土しています。この町で製作された鉄製品は、この町や近隣地域で暮らす人々の暮らしを豊かに彩っていたことでしょう。

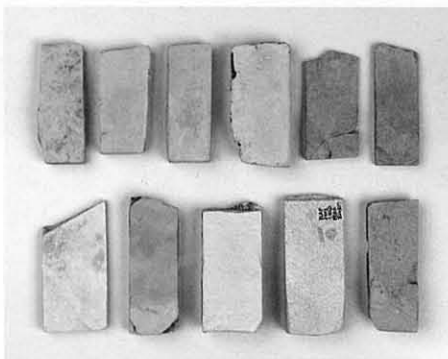
(主任学芸員 鈴木康之)



【写真1】鞆の羽口



【写真2】鉄器の未製品



【写真3】刃物の研磨に使われた砥石



【写真4】手斧の刃先